

博士学位論文要旨

多層的なネットワークモデルとしての日本語条件表現の研究

—認知言語学の視点から—

城西国際大学大学院

人文科学研究科比較文化専攻

劉 曉華

要 旨

本研究は日本語の順接的な条件表現に用いられる「ば」「たら」「と」「なら」四形式の意味と用法を分析し、学習者の習得調査と教科書分析の結果とともに、中国語を母語とする日本語学習者の習得に与える示唆を考察するものである。

研究内容は、主に、認知言語学による日本語条件表現の意味分析とその記述、日中の条件表現の対照研究、条件表現の習得支援への応用の三つであり、全部で、八章から構成されている。

まず、序章では、本研究の目的と背景を述べ、認知言語学的なアプローチと本研究で援用するプロトタイプカテゴリー論、事態認知モデルを概観し、認知言語学の視点から日本語の条件表現を捉える可能性と必要性を論じた。

第2章では、言語学と日中対照言語学、第二言語習得論において、今まで、条件表現がどのように研究されてきたかを概観し、本研究の研究対象にする条件表現の四形式に関する先行研究の結果をまとめた。そして、条件表現の意味分析と対照研究、日本語教育の観点から見て、学習者の条件表現の習得を促進するためには、学習項目に関する母語話者の認知と概念構造などを明らかにすることが日本語条件表現研究の課題であることを明確にした。

第3章では認知言語学的観点から、多様な用法を持つ類義語である「ば」「たら」「と」「なら」の意味構造について分析した。具体的には、プロトタイプカテゴリー論に基づき、日本語条件表現における多層的カテゴリーモデルを構築し、「時間性」、「条件性」、「仮定性」といったスキーマを用いて、階層ごとに四形式それぞれのカテゴリーの内部構造を解明し、日本語条件表現は多層的で動的なカテゴリーモデルであることを述べた。

また、事態認知モデルのステージモデルに基づき、条件文の概念構造とその言語化を論じた。その結果、条件文は「仮定的な因果関係」を持つ事態概念への認知を言語化した表現形式であると見なすことができた。さらに、この「仮定的な因果関係」という事態概念を「直接的な因果関係」と「間接的な因果関係」の二つに分けて捉えた。直接的な因果関係とは、二つの客観的な事態間の因果関係を表すもので、間接的な因果関係とは、言語主体の意志、願望や他者への働きかけという主体側の心的態度に関わる要素が入る言語の客体と言語主体間の因果関係を表すものである。そして、Langacker の事態認知モデルのステージモデルに基づいて、各形式の表す事態概念を下位分類することにより、それぞれの事態概念を表す表現形式の表現機能と意味の特徴を考察した。その結果、この事態概念の異

なる性質によって、前件が動作性述語である「ば」形式条件文と「と」形式条件文の文末モダリティーの制約現象を解釈した。

さらに、理想的な事態認知モデルのビリヤードボールモデルを援用し、「直接的な因果関係」という事態概念を表す「ば」「たら」「と」の三形式を対象に、その言語化のプロセスに注目し、各形式のプロトタイプ的な意味を、それぞれ「条件必要性への焦点化」、「条件実現性への焦点化」、「結果出現の必然性への焦点化」と特徴づけた。このように、日本語の条件表現は、一つの事態概念の異なる構成要素を、発話意図に合わせて異なる焦点化を行い、事態概念を言語化する形式であることが分かった。

最後に、類義性の高い「ば」「たら」「と」の三形式を対象に、ベクトルモデルを構築し、言語主体の発話意図と三形式の表現機能によって、三形式の意味記述を試みた。このベクトルモデルとは、言語主体の事態概念への認識度という要素を取り入れ、言語の客体側と言語主体側の二つの側面から言語を捉えるものである。モデルの構築は「仮定的な因果関係」という事態概念の「条件」、「結果」、「条件の実現」の三要素と、それに加えて言語主体によるこれらの三要素への認識度という合計四つの要素を用いて行った。このベクトルモデルは言語主体の認知活動の多様性と個別性というダイナミックな特徴を表すことができる。このようなベクトルモデルによって、「ば」「たら」「と」形式の独自の意味の特徴を検討した。

第4章では、母語話者の言語使用コーパスと母語話者による典型性判断テストという二つの方法を採用し、日本語母語話者の使用実態を調べることにより、第3章の結論の妥当性を検証した。

まず、母語話者の言語使用コーパス調査では、国立国語研究所が作成したCSJとBCCWJを使用し、合計8707例を抽出した。その内条件用法は5869例あった。さらに、その内の仮定用法の用例を、「因果性」、「仮定性」、「実現可能性」、「文の伝達機能」、「期待性」、「前件述語の性質」、「主語の異同」といった分類基準を用いて、階層的にその用例分布の考察を行った。それによって、三形式の意味領域の役割分担を明らかにした。

調査の結果を見ると、三形式には意味上の共通点が見られた。また、各形式の独自の特徴の検証もできた。その結果、「ば」形式は、前件条件の必要性を強調することであり、「たら」形式は前後事態間の「時間的關係」を表すのが特徴的な意味用法である。「と」形式条件文は、その表現意図は、ある条件の下で、結果事態の望ましさに関わらず、必然的に後件の結果事態が起こるということにあることが確認できた。

次に、言語使用コーパスの他に、母語話者の典型性判断テストも行い、母語話者が持つ

ている「ば」「たら」「と」三形式の意味領域に関する認識を明らかにした。その結論は、言語使用コーパスで明らかになった各用法における三形式の使用頻度と一致することが確認でき、第3章で規定したプロトタイプの意味の検証ができた。

第5章で、日中対訳コーパスを調査資料とし、中国語との対応関係から、四形式を用いた条件文の中国語訳の意味を考察することにより、日本語条件表現の意味分析を検証した。つまり、同じ事態概念を表す言語形式として、中国語訳に用いられた「関連詞」の意味分類を行うことにより、外部から日本語の条件表現の意味領域を考察した。また、四形式の中国語訳が各意味領域における分布を見ることにより、日中条件表現の対照研究を行った。

その考察の結果を形式ごとに見てみると、「なら」形式は「仮定性」が一番強いという意味特徴を持つことが裏付けられる。「ば」「たら」「と」の三形式と比べると、前後事態間に時間的關係が見られないという特徴も目立つ。さらに、「なら」形式の三つ目の特徴として、因果關係を表す関連詞に訳された用例が、四形式の中で一番多く、「条件文」と「原因・理由文」の橋渡しのような存在であることも確認できた。

「ば」形式は、「条件複句」に用いられる関連詞の「只要」類に訳されたものが四形式の中で最も多く、条件を焦点化するという特徴が顕著である。

「たら」形式の訳語には、「時間關係」を表すものが最も多い。それは、「たら」形式が条件の実現、つまり「時間性」を焦点化する特徴があることを裏付けている。次に多い訳語は、仮定複句に用いられる「如果」類の関連詞である。ここから仮定性も強いという「たら」形式の特徴が見られた。

「と」形式の意味は、「仮定的」、「条件的」というよりも、「結果事態出現の必然性」の焦点化である。

第6章では、三つの調査を用いて、学習者の習得実態を調査し、母語話者の理解との差異を考察した。日本語の条件表現の各形式は、「因果性」「仮定性」「時間性」「期待性」などの諸要素を含めた複合的な「仮定的な因果關係」概念を言語化する中で、それぞれ意味の役割分担をしているにもかかわらず、学習者はそれらを明確に認識していないのである。

このような条件表現が表す複合的な「事態概念」に関しては、母語話者は、条件表現の背後にある事態概念の言語化プロセスにおいて、一つの事態を一次元的ではなく、多次元的に捉え、異なる部分を焦点化して言語化する。学習者は、このような日本語の条件表現の事態概念の認知を習得していなければ、条件表現の意味と機能を深く理解することはできないであろう。つまり、学習者の習得を阻害すると考えられる諸要因の中で、最も本質的な要因は、学習者が日本語の条件表現が表す「仮定的な因果關係」という事態概念に関

する知識の不足である。

第7章では、現在、中国で出版された日本語教科書を3冊取り上げ、各教科書に見られた条件表現の扱い方を、条件表現の提出、用法の解説、例文の提示、練習問題などの面から考察し、その問題点を指摘した。そして、認知言語学のアプローチや第二言語習得研究の成果を踏まえ、条件表現に関する教科書の取るべき扱い方について論じ、具体的な解決案として、用法基盤モデルに基づく指導方法と学習者の「事態概念の再構造」と条件表現の「カテゴリーの再構築」を支援するという3点を提案した。

最後の終章では、本研究の結果をまとめた上で、これらの研究成果を日本語教育の現場における応用、学習者の習得過程にさらに目を向け、特に学習者の中間言語体系を考察することを今後の課題として述べた。